

聞き手配慮要素からみた 超級日本語話者の 発話の特徴

宮永愛子・松田真希子

◆要旨

本稿では、「超級」レベルの日本語非母語話者の発話について、聞き手への配慮に関わる要素のうち、フィラー、言い換え、終助詞を含む表現を手掛かりに、その特徴をOPIデータに基づき量的、質的に探った。その結果、(1) フィラーや試行的提示を多用し、具体例の提示や、言い換えをしながら、聞き手に適切に理解してもらおうと表現選びに苦心している、(2) 試行的提示、不確定性を示すフィラー、曖昧さを示す文末表現等を多用し、発話を不確定なものとして提示することで聞き手を巻き込む、(3) 「んですよ」「んですね」「んですよね」などの、終助詞を含む文末表現を用いることで、相手の知識状態を確認しながら、談話を組み立てている、などの特徴が確認された。

◆キーワード

超級話者、OPIデータ、聞き手配慮、フィラー、終助詞、試行的提示

◆ABSTRACT

This study investigates the characteristics of discourse observed in superior-level speakers of Japanese as a second language. We analyzed ACTFL-OPI interview data quantitatively and qualitatively, while focusing on elements important to listeners, including fillers, paraphrasing, and sentence-final particles among others. The results revealed the following characteristics of superior-level speakers: (1) they attempt to find more appropriate expressions to make themselves understood, by using fillers or testing expressions, rephrasing, and providing concrete examples, (2) they involve listeners by displaying their uncertainty and ambiguity, through the use of certain types of fillers and sentence-final particles, (3) they construct sentences while checking the listener's state of knowledge by means of sentence-final expressions like *-ndesuyo*, *-ndesune*, *-ndesuyone*.

◆KEY WORDS

superior-level speakers, OPI data, consideration to listeners, fillers, paraphrase, sentence-final particles

Discourse Characteristics of Superior-level Japanese Speakers Viewed from Speaker's Consideration to the Listener

AIKO MIYANAGA & MAKIKO MATSUDA

1 はじめに

外国語を学習する者であれば誰もが、聞き手に、口頭運用能力が高いという印象を与えたいものではないだろうか。では、いわゆる口頭運用能力が高いと判断される日本語非母語話者の発話にはどのような特徴があるのか。口頭運用能力の高い非母語話者の発話の諸相が明らかになれば、日本語の会話指導の現場において、体系的な指標を示すための一資料を提供することになるのではないかと考える。

OPI (ACTFL) や、CEFR (Council of Europe)、JF 日本語教育スタンダード (国際交流基金) などのレベル判定基準によると、口頭運用能力の高さを示す要素として、談話構成力や、談話の結束性、語彙の豊富さ、正確さなど様々な要素が挙げられている。これら談話の伝達内容を直接構成する部分に関しては具体的に挙げられていることが多い。しかし、伝達内容に直接関わる部分というよりも、聞き手への配慮に関わるようなメタ言語的な要素に関しては、未だ十分に明らかにされていないのが現状である。このようなメタ言語的な要素も、聞き手への印象を大きく左右する部分であり、口頭運用能力の高さと何らかの相関があるのではないかとと思われる。そこで本稿は、口頭運用能力を測定するための枠組みである ACTFL-OPI で「超級」と判定された日本語非母語話者の発話の、聞き手への配慮に関わる要素に注目し、その特徴の一側面を明らかにすることを目指す。

2 先行研究

超級話者の談話の特徴づける要素を、「談話内容の質に関わる部分」と「聞き手配慮に関わる部分」に大別し整理した松田ほか (2013) は、「聞き手配慮に関わる部分」として、「注釈・補充」、「注意喚起・発話緩和」、「確認・同意要求」などの要素を挙げている。これらの要素の日本語非母語話者の使用と口頭運用レベルとの相関に関しては、十分に明らかにされているとは言い難い。本稿では、松田ほか (2013) の枠組みに従い、「注意喚起」や「注釈・補充」に関わる

ものとして「フィルター」を、「注釈・補充」に関わるものとして「言い換え」を、「注意喚起・発話緩和」や「確認・同意要求」に関わるものとして「終助詞」を取り上げ、これらの使用について超級話者の発話を分析する。日本語学習者、特に上級・超級話者に注目し、「フィルター」や「言い換え」などの使用実態を、レベルごとに分析した研究には、荻原ほか (2001)、山内 (2009)、土屋 (2012)、松田ほか (2013) 等があるが、これら会話の周辺的な要素の使用頻度に関して、中級、上級話者と比較して超級話者にはどのような特徴があるのかということについては、その全体像が明らかにされているわけではない。また、これらは量的な分析が中心で、各要素が会話のどのような局面で、どのように使われているのかという質的な分析や、なぜそれらの要素が使われるのかという考察については十分であるとは言えない。超級話者の発話の諸相を明らかにするためには、量的にこれらの要素を分析するだけでなく、どこでどのように使っているのかも明らかにする必要がある。一方、質的な分析に関しては、奥野ほか (2010)、金庭ほか (2011) の一連の研究が、3名の韓国語母語話者の縦断データを用いて行っているが、超級話者に関する報告はない。そこで、本稿では、より大規模なデータを用いて、超級話者の発話を、量的に中級や上級話者と比較した上で、実際にどのような使われ方がされているのかを質的にも分析する。

3 分析対象データと分析方法

分析データとして用いたのは、ACTFL-OPI の枠組みで収録された、国立国語研究所による「日本語学習者会話データベース」である。この中から、超級9名、上級9名 (うち上3名、中3名、下3名)、中級9名 (うち上3名、中3名、下3名) の計27名^[註1] のインタビューデータをランダムに選んで、分析対象とした。本稿では、まず、データの全体像を把握するために、量的分析を行った上で、特徴のある要素に関して、どのような使われ方がなされているのかを質的に見た。量的分析には、レベルごとの特徴を明らかにするために便利なことから、KH-Coder (テキストマイニングツール) を用いた。データの概要を表1に示す。

表1 学習者データの概要 (KH-Coder)

	全て	中級	上級	超級
総抽出語数	129,154	34,711	44,798	49,645
異なり語数	7,218	1,951	2,450	2,817

4 分析結果

4.1 多様なフィラーの使用

4.1.1 量的分析

まず、超級話者のフィラーの使用について分析した。先行研究では、KYコーパスを分析した山内 (2009) が、超級話者には、「あの」「まあ」「なんか」「その」「こう」の出現数が多いことを、本稿と同様のデータを扱った土屋 (2012) は、超級話者に最も多いフィラーは「あの」であることを報告している。また、松田ほか (2013) は、超級話者は、上記のフィラーに加え、「こう」「その」「あの一」「もう」「まあ」「いや」の出現頻度が高いことを報告している。そこで本稿では、中級レベルから超級レベルに上がるにつれて、フィラーの「あの」「あの一」「こう」「いや」「もう」「まあ」「なんか」「そうですね」の出現頻度がどのように変化するかを、KH-Coderを用いて分析した。表2は、各フィラーの出現状況を超級と上級で比較した結果である。「なんか」と、超級と上級で逆転していた「えーと」を除くと、すべてのフィラーにおいて、超級で有意に出現頻度が高かった。

表2 フィラーのレベル別出現状況 超級-上級 (KH-Coder)

	あの	あの一	まあ	こう	なんか	えーと	いや	もう	そうですね	ケース数 [注2]
超級	62 (7.66%)	167 (20.64%)	253 (31.27%)	109 (13.47%)	45 (5.56%)	76 (9.39%)	13 (1.61%)	86 (10.63%)	162 (20.02%)	809
上級	35 (3.34%)	110 (10.51%)	169 (16.14%)	59 (5.64%)	44 (4.20%)	131 (12.51%)	6 (0.57%)	60 (5.73%)	114 (10.89%)	1047
χ^2 値	16.341**	36.137**	58.625**	33.114**	1.563	4.167*	3.848*	14.449**	29.375**	

また、上級と中級話者の比較をすると、「あの」を除いたすべてのフィラー

に関して、上級で有意に出現頻度が高かった (表3参照)。

表3 フィラーのレベル別出現状況 上級-中級 (KH-Coder)

	あの	あの一	まあ	なんか	こう	えーと	いや	もう	そうですね	ケース数
超級	33 (3.15%)	110 (10.51%)	169 (16.14%)	44 (4.20%)	59 (5.64%)	131 (12.51%)	6 (0.57%)	60 (5.73%)	114 (10.89%)	1047
上級	27 (2.58%)	51 (4.87%)	52 (4.96%)	5 (0.48%)	17 (1.62%)	33 (3.15%)	0 (0.00%)	10 (0.95%)	37 (3.53%)	1048
χ^2 値	0.434	22.694**	68.191**	30.212**	22.992**	62.345**	4.183*	35.534**	41.301**	

以上のことから、一部の例外はあるが、中級、上級、超級と上がるにつれて、フィラーの出現頻度が高くなるということが言える。

4.1.2 質的分析

次に、超級話者がフィラーをどのような場所で多用しているのかを見てみたい。超級話者の「あの」が頻出している場面を見ると、詳細な説明や、ストーリーの紹介、意見述べ、ロールプレイなどのまとまりのある談話が要求される場面であることが多い。例1は、先行研究の報告と同様、特に出現数の多い「あの」と「まあ」が頻出している箇所の超級話者の発話の断片である (フィラーを太字で示す)。

[例1]

ん一本音と建前は韓国にもどこにもあると思うんですが <はい> [注3], **あの一** なんていうんですよ, **あの**, 例えば仕事を一緒に <はい> 何かを一緒にするときの <ん>, 解決をしていく <ん> 仕事のしかたーがちょっと違うの**かな** ーと思って <んーん> 例えば何かえーと 一緒にやるときって, きれーいに分けても <ん> お互いにこう助けーてもらわないと <ん> 進まないところ <ん> ってあると思うん <ん> ですが <はい>, **あの** そういうときに韓国の人は一般的に言って <ん>, **まあ** そんなに線を, きれいに引かなくても <ん> じゃあ今度はあたしが, 今回はあたしが助けてあげよう <んー>, **まあ** いずれは みたいな <んー> 感じで <んんん> そんなに「ここはあたしのことだったんだけど今回は助けてあげる」とか <んー, んんん> っていうことまで,

これは、「本音と建て前」について、日本と韓国の違いを説明している場面である。定延・田窪(1995)によると、「あの」は、聞き手に向けた適切な表現の検討中であることを示すという。確かに、「あの」が頻出している場面では、「あの」以外にも、「何ていうんでしょう」などの言葉を探していることが分かる表現や、「かなーと思って」「みたいな感じ」のような曖昧さを示す表現が出現していた。これらを使うことで、自身の表現が確定的なものではないことを示していると言える。他にも「例えば」と言いながら、具体的な例を示したり、別の言葉で言い換えたりしながら(波線部分参照)、聞き手に、より理解してもらおうと、様々な手段を用いている様子が見てとれる。

例2も同様に、「まあ」「あの」が頻出している場所の周辺では、聞き手に向けた適切な表現を選んでることを示す表現が多く見られた。具体的には「なんというんでしょう」や、「こう」「その」などの言葉を探していることが分かるフィラー、「例えば」を用いた具体例の提示、「(お祭り)的なイベント」「そういう(文化遺産)」を用いた言い換えの誘導などが確認された。これらにより、話し手は聞き手に分かってもらおうと様々な工夫をしていると言える。

[例2]

まああることはある<ある, えー>, ありますが<くん>, **あのー**, なんというんでしょう<くん>, ま, かん, すごくこう勘違いしてるなっていうものが<くん>, **あのー**例えばこう, 文化遺跡だったりこう文化遺産がの, **あの**<はい, あります, ん>, 存在してるようなば, 都市ですな<え, えー>, まわたくしの地元もそうなんですけれども<はい, ん>, そういうまあ無形でも有形でも<はい> こうそういうね文化遺産を持ってる<くん>都市っていうのは<くん>, 今おっしゃったような**その**<くん>, **あの**お祭りの**な**<くん, んんん>, **あのー**イベントを, やっぱり, やるんですよ<えー> (太字と波線は筆者) [超級323]

一方、上級話者の「あの」が出現している場面を見ると、聞き手の理解に配慮して適切な表現を選んでる例は少なかった。例3のように、言葉が分から

ないために母語話者であるテスターに確認するような場面や、例4のようにまとまった談話において、言葉を探す間の時間稼ぎや、間つなぎ語として用いられていることが多く見られた。

[例3]

あの黒いのなんだっけ<黒いの>炭<くん>, 炭を一<はい>すすかって[使って]<はい>ご飯すくったり[作ったり]<あーそうですか>, そうしてます (太字と波線は筆者) [上級139]

[例4]

はい, えーとー, **あのー**, 若い, **あの**若い, えーと女の子が, **あの**, おっ, 夫**あの**ご主人は<くん>, せん, **あの**, 軍隊に入って<くん>, でも**あの**彼は, **あのー**, いき, 生きたいん, ですから, ぐんたいー[軍隊]を, 軍隊に, 逃げ<くん>, 逃げてきて, あそれは, **あのー**, 犯罪, と, **あの**犯罪と思われて<くん>, いるんですから<くん>, **あのー**, 彼は, **あのー**, えーと森の中にとか<くん>, だれか, **あのー**, だれかが, 彼が逃げた, と<くん, ん>, 見えないようにして<くん>, ちょっと言葉は足りない{笑} (太字は筆者) [上級276]

4.2 言い換え

4.2.1 量的分析

韓国語話者の縦断データを用いた奥野ほか(2010)では、中級から上級へと習得が進むにつれ、意味のない繰り返しや文法の自己訂正のための言い換えが減り、聞き手配慮の繰り返しや言い換えが増えることが指摘されているが、超級になれば、よりその傾向が顕著になるのではないかと予想できる。本稿では、言い換えが行われている箇所を量的に分析するための手がかりとして、「試行的提示」に注目した。試行的発話とは、「発話に際して用いる表現の選択に躊躇がありとりあえずある表現を選んで発話したと見させる現象」(北野2005)である。本研究では、試行的発話として、「と(って)いうか」、「と(って)いうのか」「と(って)いいですか」「と(って)いうんですか」「と(って)いうん

でしようか」を取り上げ、中級～超級話者のデータを数え上げた。試行的提示に関しては、フィルターと違い、数が少ないため、手作業で数え上げた。表4は、中級から超級までの話者ごとの、試行的発話の使用数である。試行的提示は、中級では全く見られず、上級から超級になるにつれて出現数が増えていた。試行的提示の使用も、超級話者に特徴的な要素であると言える。

表4 話者ごとの試行的提示の出現数

レベル	データ番号	というか	というのか	といいますか	というんですか	というんでしょうか	合計	b.総語数	c.出現率(a÷b)
超級	10	3				1	4	3098	0.13%
	15	1					1	5627	0.02%
	76	3					3	6842	0.04%
	202	2		3			5	5581	0.09%
	230	6					6	5884	0.10%
	258	4					4	5353	0.07%
	323	10		1		1	12	6101	0.20%
	338	8					1	5265	0.17%
	349	11					2	5892	0.22%
合計	48	0	4	4	1	1	57	49643	0.11%
上級	上127	2					2	3919	0.05%
	上242						0	7264	0
	上261						0	4801	0
	中92	3					3	4146	0.07%
	中238	1					1	5346	0.02%
	中272						0	4551	0
	下139	3					3	5771	0.05%
	下275	6		1			7	4517	0.15%
	下276						0	4482	0
合計	15	0	1	0	0	16	44797	0.04%	
中級	上269						0	3705	0
	上295						0	3816	0
	上296						0	3540	0
	中278						0	4106	0
	中347						0	3294	0
	中193						0	4092	0
	下131						0	3267	0
	下144						0	4475	0
	下194						0	4415	0
	合計	0	0	0	0	0	0	34710	0

4.2.2 質的分析

では、試行的提示が出現するところで、超級話者が何を行っているのかを見よう。例5は、母国の外国語教育について説明している場面である。試行的提示を用いて、「教え込み」から、「詰め込み」と言い換えながら、聞き手により理解されやすい表現を選ぼうとしているだけでなく（試行的提示を太字下線で示す）、「例えば」と具体的な例を補足しながら、聞き手の理解を促している（太字と波線部分参照）。

[例5]

そうですね、おし、教え込みですかね〈んー〉、詰め込みというか〈ん〉
 そうい教育ですな〈んー〉、んやはり例えば外国語勉強っていうのはやはり、例えば日本語のうよく [能力] いっきいっ、1級ですか〈ん〉、それをまあ
 合格できるようにそれが最終目標なので〈ん〉、別に話す、せるかどうかその、
 話すって、そういう、重点に置いてるんじゃないくて〈ん〉なんか読むとか
 〈ん〉、文法の知識とかちょう聴解とかそういうのがなんか重点に置いて
 るんで〈ん〉結局みんな、卒業しても話せないというのが〈ん〉、なんかす
 ごいむなしいなーと思うんですよね〈あー〉、んー

(太字、下線、波線は筆者) [超級230]

奥野ほか(2010)で報告されている上級話者の言い換えの例は、例えば、「その人が書いた本で一番なんか売れたというか、一番人気があった」(奥野ほか2010:156より引用)のように、同一文内で完結する表現レベルでの言い換えであるが、本研究で分析対象とした超級話者では、例5のように、表現レベルでの言い換えに留まらず、具体例を挙げるなどして前に述べたことをより詳しく説明し直すという段落レベルに及ぶ言い換えが見られた。また、言い換えをする場面では、「まあ」「なんか」などのフィルターも頻出している。「なんか」は、宮永・大浜(2010)によると、発話が十分な熟慮を経ていないことを示すものであるというが、試行的発話が発現する場所では、このようなフィルターも用いながら、自身の発話を不確定なものとして提示し、最終的な判断は聞き手に委ね、聞き手を巻き込むような形で発話をしていることが分かる。

例6では「他人を敬うというか」「遠慮するというか」と、試行的提示が繰り返され、発話形式が不確定なまま続けられている(太字下線部分参照)。また、「あの」や「なんていうんでしょうか」などの聞き手に合わせた適切な表現を探していることが分かる表現も見られる(太字と波線部分参照)。

[例6]

まずあのー、それはある意味で儒教的な<はい>考えかた<はい>であって、その、あのーそれに、増してですね<はい>やっぱり、なんていうんでしょうかあの、お互いに<はい>、あのー他人を敬うというか<はい>遠慮するというか<はい、はい>、そのせいさん、精神がやっぱりす、欠けてきているなと<はい>、昔よりもですね (太字、下線、波線は筆者) [超級338]

このように試行的提示が頻出する箇所では、フィラーが頻出する箇所と同様、聞き手に適切に理解してもらおうと奮闘している様子が見られたり、不確定な表現形式のまま提示し、聞き手を巻き込むような話し方がされたりしていた。

一方上級話者の試行的提示が使用されている箇所を見ると、例えば、例7では、「中国の内モンゴルから直接日本に来た」という自身の直前の発話が適切ではなかったため、言い直すところで、試行的提示が使われていた。このように、上級話者では、聞き手の理解を促すため、適切な表現を選ぼうとしているというよりも、単なる言い換えの際に試行的提示が使われることが多かった(波線部分参照)。

[例7]

I^[註4]: えっとー、日本には中国の内モンゴルから、直接来りました

T: あーそうですか

I: はい、直接というか {笑}、前はあのーロシアで、育ててじゅう一ななさい [17歳] まで、高校卒業してから、モンゴルに、留学して4年間留学して<んー>、そのあとは、2年間、ロシアへ帰って、父の一手伝いとかやって<んー>、そのあとは、中国の、中国語を勉強しに

行って<はーあー>、でそこから日本に行く、機会があって<んー>、日本に来ました (太字、下線、波線は筆者) [上級92]

奥野ほか(2010)では、上級レベルでも来日後1年半以上経てば、聞き手配慮の言い換えが増えていったと報告されているが、横断的な本データでは、上級レベルにはほとんど見られなかった。これらの聞き手配慮要素の使用には、口頭運用レベルだけでなく、日本語母語話者との接触経験の長さも関係があることが示唆できるのではないかと考えられる。

4.3 終助詞を含む表現

4.3.1 量的分析

最後に、終助詞を含む表現を見る。縦断的なOPIデータを分析した金庭ほか(2011)は、滞日歴が上がるにつれて、聞き手への配慮が生じて終助詞「ね」の使用が増えたり、「んですよ」が上級以降で一時的に多く使用されたりすると報告している。本稿では、終助詞を含む表現として、初級からでも使用が見られる「ね」や「よ」のみではなく、「のだ」を含む「んですよ」「んですよ」「んですよ」に注目する。表5は、終助詞を含む表現の話者ごとの出現数である。

「んですよ」「んですよ」「んですよ」は、中級ではほとんど見られず、上級から超級に上がるにつれて、出現数が増えている。超級話者を見ると、「んですよ」に関しては、個人差も見られ、一人の被験者(76番)が多用していることで、総出現数も多くなっているが、「んですよ」は、超級話者全員に安定した使用が見られる。「んですよ」は、金庭ほか(2011)の報告とは異なり、上級では、一人の話者に使用が見られたのみで、安定した使用が見られるのは超級である。金庭ほか(2011)の被験者は、いずれも韓国語話者である。日本語と同様、「のだ」のような形式や「ね」「よ」に相当する終助詞が存在する韓国語話者にとっては、終助詞を含む表現が比較的習得しやすいため上級から使用が見られたのではないかと考えられる。

表5 話者ごとの終助詞を含む表現の出現数

レベル	データ番号	んですね	んですよ	んですよね	a.合計	b.ターン数 [注5]	出現率 (a÷b) [注6]
超級	10	1		6	7	114	6.14%
	15	10	12		22	85	25.88%
	76	16	65	13	94	68	138.24%
	202	7	1		8	78	10.26%
	230	3	7	20	30	83	36.14%
	258	10	1	7	18	98	18.37%
	323	13	2	2	17	125	13.60%
	338	13	1	2	16	82	19.51%
	349	6		1	7	76	9.21%
	合計	79	89	51	219	809	27.07%
上級	上127		5		5	59	8.47%
	上242	5	4	2	11	152	7.24%
	上261	1			1	184	0.54%
	中92	1			1	141	0.71%
	中238	10	3		13	143	9.09%
	中272	1			1	93	1.08%
	下139	5	1		6	81	7.41%
	下275				0	83	0
	下276				0	111	0
	合計	23	13	2	38	1047	3.63%
中級	上269	2			2	77	2.60%
	上295	1			1	130	0.77%
	上296			1	1	149	0.67%
	中278				0	138	0
	中347				0	110	0
	中193				0	130	0
	下131				0	104	0
	下144				0	100	0
	下194				0	110	0
	合計	3	0	1	4	1048	0.38%

4.3.2 質的分析

では、終助詞を含む表現はどのような使われ方をしているのだろうか。例8に示すのは、「んですね」が出現していた発話例である。

[例8]

やっぱり、あのー、わりと、なんていうかなヨーロッパでは〈はい〉、あの、父親も母親も同じ程度〈はい〉こう子供と〈えーえー〉、あの、かかわっているんですね、かかわってる時間がわりと〈はーは〉、あの、おんなじなんですね〈あーそうですか〉、で父親も積極的に学校の行事〈はい〉とかにも、あの、出ているし、まあ、家庭では、まあ毎晩一緒に〈ん〉、ご飯食べてるし、そういうこともうちょっとなんていうかな、家庭の〈んー〉中の、なんていうかな〈はい〉、あの、構成っていうか〈はい〉それは、あの仕事とも関係が〈はい〉あると思いますので〈えー〉なかなか変えられない〈んー〉と思いますけどもうちょっとこう、お父さんも教育に積極的に〈はい〉、関わるような〈はい〉なんかシステムを作ってもらいたいなーというふうに思いますね
(太字、下線、波線は筆者) [超級258]

「んですね」が使われている発話を見ると、ヨーロッパ出身の話者がヨーロッパの子育て事情について話すという、いわば自身の専有的な情報を聞き手に与える際に、用いられている(太字下線部分参照)。これは、宇佐美(1999)のいう聞き手の感情を配慮して自身の発話を和らげる「発話緩和」の機能を果たす「ね」であると言える。このような「ね」は、ある程度の長さのあるまとまった発話で出現することが多く、聞き手の知識状態を確認しながら、発話を組み立てるようなところで使用されていた。また、ここでも、「あの」や「なんていうかな」などのフィラーや試行的提示が出現し、聞き手に配慮して適切な表現を選ぼうとしていることが見てとれる(太字と波線部分参照)。さらに言えば、ここでは、積極的に育児に参加する母国の子育て事情に比べ、聞き手(テスト)の国はそうではないため、もっと父親が育児に参加できるようなシステムを作るべきだという、聞き手の国に対しての否定的なコメントをしている場面でもある。これは、ポライトネス(Brown & Levinson 1987)の枠組みで言えば、FTA (Face Threatening Act) であると言える。そのため、できるだけFTAを和らげるために、表現を選ぼうとしているように思われる。このように、聞き手の知識状態や、FTAも考慮しながら、談話を組み立てていくような場所で、終助詞を含む表現が用いられていた。

一方、上級話者が終助詞を含む表現を用いている箇所を見ると、まとまった談話の冒頭部分で出現している例はほとんど見られず、例9や例10のように、単独の文で用いられることが多かった。例えば、例10のように、質問に対する返答であれば、「すごく嬉しいと思います」などの方が自然ではないだろうか。

[例9]

I : すごく大変だったんですね11がづ [11月]

T : あ、それは、あー、外に出られないぐらい、ということですか

I : そうですね (太字と下線は筆者) [上級238]

[例10]

T : 例えば〈おみやげを〉、【姓B】さんがその過剰包装できれいに包んであるものをいただいたときは〈はい〉、うれしいですか

I : すごくうれしいんですね

T : うれしいですか {笑} 〈はい〉 そうですね (太字と下線は筆者) [上級238]

5 まとめと今後の課題

本稿では、フィルターや終助詞、言い換えなどがどのくらい使われているかという量的な分析だけでなく、どのような局面で、なぜ使われているのかということを見ることで、超級話者の発話の諸相の一側面として、次のことが明らかになった。

- (1) 「あの」や「こう」などのフィルターや、「というか」「といいますか」などの試行的提示を用いて、具体的な例示をしたり、言い換えたりしながら、聞き手に適切に理解してもらおうと表現を選んでいる。
- (2) 「というか」「といいますか」等を使った試行的提示や「なんか」などの不確定性を示すフィルター、「ていう感じ」「かなーと思って」などの曖昧さを示す文末表現を多用し、発話として十分熟慮したものではないが、とりあえずこのような形で理解してほしいという態度で発話をしている。
- (3) 「んですよ」「んですね」「んですよ」などの、終助詞を含む文末表現

を用いることで、相手の知識状態を確認しながら、談話を組み立てていく様子が見られた。

以上のような超級話者の話し方が、日本語として自然に聞こえる要素になっているのではないだろうか。平田 (2012) によると、よく知っているもの同士の「会話」よりも、異なる価値観や文化的な背景をすり合わせる「対話」の方が、フィルターなどが増え冗長率が高くなるという。上級以上の話者になると、会話者間の知識状態を確認しながら、より聞き手を意識した話し方ができるようになるのではないかと考えられる。また、このことは、各レベルで求められるタスクとも関わりがあるように思われる。身近で具体的な話題が多い初級～中級レベルと比べて、抽象的な話題や詳細な描写や説明、より複雑な状況での対処や説得的な意見が求められる上級～超級レベルでは、話し手と聞き手の知識状態に隔たりがあることが多い。そのような状況で、話し手は、ただ聞かれたことに答えるのではなく、自分だけが持っている情報をどのように説明すれば相手に理解してもらえるのかということに気を配らなければならない。そのように奮闘する中で、無意識的に、冗長な話し方になるのではないかと考えられる。自己の発話に集中しなければならぬ初級～中級から、より「対話」的に、聞き手に向けた話し方になるのが上級～超級ではないかと思われる。

一方で、超級話者は、フィルターや試行的発話を用いながら、「とりあえずこのような形で理解してほしい」という未完成の状態相手に発話を提示し、聞き手を巻き込みながら協働で談話を構築するような「共話」型 (水谷1993等) の話し方をしてきた。

会話者間の知識状態にギャップがあることを前提にした対話型の話し方と、聞き手からの協力をあてにする共話型の話し方は、一見矛盾するように見えるが、対話でありながらも共話的な話し方をするのが日本語の特徴であるのかもしれない。それは、他言語との対照研究を通して、今後明らかにされることを期待したい。また、本稿で扱ったデータでは、超級話者はほとんど韓国語母語話者で、上級、中級と比べると母語に偏りがあったため、母語の影響を受けていないとは言えない。このような母語のことも考慮した分析は、今後の課題としたい。

〈宮永一広島女学院大学／松田一金沢大学〉

[付記]

この研究は、国立国語研究所のプロジェクト『日本語教育データベースの構築—日本語学習者会話データベース』を利用して行われたものである。

注

- [注1] …… 被験者の母語は、超級が、韓国語、中国語、ブルガリア語、上級が、韓国語、中国語、ロシア語、インドネシア語、ポーランド語、ウズベク語、英語、中級が、韓国語、中国語、モンゴル語、タイ語、ベトナム語、イタリア語、スウェーデン語である。
- [注2] …… ケース単位は、文とした。ここでいう文とは、発話文のことで、分析データでは、改行、すなわち話者交替のあったところである。
- [注3] …… 例中の、くゝの中の発話は、テストターの相づちである。
- [注4] …… 例中のIは学習者を、Tはテストターの発話であることを示す。
- [注5] …… ここでいうターンとは、学習者会話データの1行、すなわち、話者交替があったところで改行される行とした。KH-Coderの分析の際に用いた「ケース単位」に相当する。
- [注6] …… 終助詞を含む表現の出現率が100%を超えているデータがあるのは、1ターン内に2回以上出現していることがあったためである。

参考文献

宇佐美まゆみ (1999) 「「ね」のコミュニケーション機能とディスコースポライトネス」現代日本語研究会 (編)『女性のことば・職場編』pp.241-268. ひつじ書房

荻原 稚佳子・齋藤 眞理子ほか (2001) 「上・超級日本語学習者における発話分析—発話内容領域との関わりから」『世界の日本語教育』11, pp.83-102.

奥野由紀子・金庭久美子・山森理恵 (2010) 「日韓共同理工系学部留学生の縦断的な発話分析—繰り返し・言い換えに着目して」『日本語 OPI 研究会 20 周年記念論文集・報告書』pp.148-159. 日本語 OPI 研究会

金庭久美子・奥野由紀子・山森理恵 (2011) 「日韓共同理工系学部留学生の縦断的な発話分析—終助詞を含む表現に注目して」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』18, pp.5-32. 横浜国立大学留学生センター

北野浩章 (2005) 「自然談話に見られる逸脱的な文の構築—試行的提示のための形式「…と言うか」「…ですか」など」串田秀也・定延利之・伝康晴 (編)『活動としての文と発話』pp.91-121. ひつじ書房

定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構—心的操作標識「ええ」と「あの(一)」」『言語研究』108, pp.74-93. 日本言語学会

土屋菜穂子 (2012) 「日本語学習者の口頭能力レベル別言いよどみ使用—『日本語学習者

会話データベース』のn-gram分析をもとにして」『日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.253-254. 日本語教育学会

平田オリザ (2012) 「日本語教育と国語教育をつなぐ「対話」」鎌田修・嶋田和子 (編)『対話とプロフィエンシー』pp.28-44. 凡人社

松田真希子・宮永愛子・庵功雄 (2013) 「超級日本語話者の談話特性—テキストマイニングを用いた分析」『国立国語研究所論集』5, pp.43-63.

水谷信子 (1993) 「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12, pp.4-11.

宮永愛子・大浜るい子 (2010) 「会話における「なんか」の働き—大学生による自由会話データを中心に」『表現研究』91, pp.30-40. 表現学会

山内博之 (2009) 『プロフィエンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房

Brown, P. & Levinson, S. C. (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press.

